

こんにちは。私は石渡真代といいます。2018年7月5日に交通事故に遭い天国に旅立ってしまった石渡睦規の母親です。南稜中学校では、睦規の命日を「自分の命も周りの命も大切にする」南稜学校いのちの日としてくれました。睦規が生きていれば、今、南稜中の3年生です。そして今の3年生は南稜いのちの日が今回で最後になります。ですから、今日は睦規の同級生の前でお話しできる唯一の機会だと思いました。

私が今日みなさんに伝えたいことは命を大切にしてほしいということ、交通事故の加害者にも被害者にもなってほしくないということです。

睦規が事故に遭ってからしばらくした2018年9月26日に、睦規を轢いたトラックの運転手である加害者の刑事裁判が行われました。よくドラマやニュースで見る光景ですね。黒い服を着た裁判官が正面にいて、被告人、弁護士、検事、傍聴席には新聞記者や傍聴人がいました。その中で裁判官に私の気持ちを訴えることができました。私が裁判で話した内容を抜粋してみなさんにお話しします。

裁判では、まず事故当日のことを話しました。

事故の前日である7月4日に中学校から自転車で登校する生徒の交通マナーがよくないと苦情が出ているというメールがきていました。私は自転車置き場で支度をする睦規に、「道路を渡る時は車が来ないように確認してからだよ」といつもより気をつけるように話しました。睦規は「昨日、先生からも言われたし、わかるとるって」と答え、私が「雨が降りそうだからカッパ着てったら？」と声をかけると、「そうだね。上だけ着るわ」とヘルメットの上から無理矢理カッパを着ようとするので、なかなか頭が出ず、ようやく頭が出た時に私を見て「へっ」と笑いました。そして、「いってきます!」といつものように出かけました。

7時58分に睦規の担任の鷲坂先生から電話がありました。「睦規くんが大きな事故に遭ったようです」と言われ、すぐに家を出ました。心臓がどきどきし手が震えました。事故現場の横断歩道には、4カ月前に買ったばかりの自転車がつぶれた状態で倒れていました。AEDを使ったみたいだったので足元がすーっと寒くなり、心臓がさらにあおり出しました。「どういうこと？睦規はどこ？」と聞きました。睦規はすでに豊橋市民病院に運ばれた後だったので、現場に到着した睦規のお父さんと一緒に病院に向かいました。車の中で「骨折とかで済むといいんだけど」と話しながらも、もしかして・・・と心臓がずっとあおっていました。

救急外来に着くと、看護師さんが来て「先生から説明があります」と診察室に案内されました。先生が何人かと救急外来の看護師長さんが来ましたが、一人の先生は泣いているし、他の先生方も何とも言えない表情をしているので、もしかして危険な状態なのかもしれないと思いました。救急医の先生から「何度か蘇生をしていますが、心臓も呼吸も戻りません」と言われ、私は息ができなくなってその場に倒れ込んでしまいました。誰かに支えられながら、とにかく睦規のもとへ行きました。処置室では睦規が先生に心臓マッサージをされていました。駆け寄って肩をつかんで何度も何度も大きな声で睦規の名前を呼びましたが、目は開きませんでした。着ていたカッパと体操服を切られて上半身裸になっている睦規の体はもう冷たくなっていました。睦規の顔はほとんど傷がなくきれいで、ただ眠っているようでした。

次に睦規について話しました。

睦規は手のかかる子でした。赤ちゃんの頃は泣いてばかりだったので、私は睦規と2時間以上離れる時間がなく、いつも一緒でした。歩けるようになってからは、目を離すとすぐに迷子になってしまうので、近所に買い物に行くだけでも一苦勞でした。ですから、睦規には手をかけ、目をかけ、そして心をつくして育てました。そのぶん、成長を感じたときはよりいっそう感動してきました。小学校を卒業してからは睦規の世界は急に広がり、友達と昼を食べに行ったり、中学校で新しくできた友達が家に来たり、何人かで遊びに出かけたりもして、本当に楽しそうに毎日を過ごしていました。特にバレー部の活動には夢中で、体力作りにも取り組み、先輩の話を嬉しそうにして輝いていました。事故の5日前に13歳の誕生日を迎えていた睦規は1年間で身長が10センチも伸びていました。声変わりもし始めていましたし、部活で力がついてきたのか、ジャムの瓶やペットボトルの蓋も私が開けにくそうにしていると、「かして」と開けてくれました。小さい頃は大変な思いをして育てていましたが、「だんだんとしっかりしてきたなあ」と思うことが多くなり、私もいろいろな場面で睦規を頼りにするようになっていました。そんな睦規のお別れ会と告別式には本当に多くの方が参列してくれ、私たちの知らない睦規のエピソードをたくさん聞くことができました。私たちからしたら睦規はまだ子どもで、心配なところがたくさんありましたが、外では驚くほどしっかりしたところもあり、たくさんの友達に好かれ、そして本当に優しい子だったのだと教えてもらいました。

そして事故後の私の気持ちを話しました。

毎日、なぜ睦規が死ななければならなかったのかと考えています。

朝、目が覚めると、睦規はもういないんだ、今日も睦規のいない1日が始まるのだと思って涙があふれます。

家の中にも、日常の行動範囲にも、睦規の名残があり、ここでこうしていたなと思うと苦しくなり泣けてしまいます。いつ帰ってくるんだろうと自転車置き場を見たり、夜中にふと目が覚めた時、ベッドで寝ているのではないかと見に行ったりすることもあります。けれども、自転車置き場もベッドも空っぽで、睦規はもういないんだと、また悲しくなります。家の4人掛けのテーブルは睦規の椅子だけ空いていて、座るたびに私たちは3人になってしまったんだと寂しくなります。睦規はしっかりしてきたとはいえ、この間まで小学生だったので「私が一緒についていってあげなくては」、「睦規を一人でなんか行かせられない」、「睦規のいない世界は私には苦しすぎる」という思いが巡り、睦規のところへ行きたいと考えてしまいます。

睦規は私たちの未来そのものでした。睦規と一緒にいった場所を思うと、楽しかった思い出が悲しくなり、これから行く場所是一緒に行きたかったと悲しくなります。その先、死ぬまで悲しみや苦しみが私につきまとうのです。

その後、トラックの運転手への思いを話し、最後に私は「加害者に罪を償う気持ちが生まれるように、睦規の本当に短く尊い命が無駄にならないように、執行猶予をつけずに実刑にしてください」と裁判官にお願いしました。けれども、判決は禁固3年執行猶予5年でした。執行猶予がつくと、刑務所には入りません。加害者が裁判官にお礼を言って刑事裁判は終わりました。その後、加害者から私たちに謝罪したいというような連絡は一回もありません。

刑事裁判が終わって陸規の自転車を返してもらいました。今日からしばらく学校に置かせてもらいます。かごがペしゃんこになっていて、事故の怖さが伝わるとと思います。自転車を見ることで、事故は現実に起こることなんだと感じてもらいたいと思って持ってきましたが、事故のことを思い出したり、怖い思いをしたりする生徒さんもいるかと思っていますので、心配な生徒さんは無理して見ないほうがよいと思います。

さてみなさんは交通事故が年間どのくらい起きているか知っていますか？

ここに陸規が事故に遭った平成30年度の資料があります。

平成30年度 交通事故件数

内閣府 交通白書より

事故発生件数	430.601件
負傷者数	525.846件
重傷者数	34.558人
死者数（24時間以内）	3532人
死者数（30日以内）	4166人
厚生労働省統計	4863人

※事故後1年以内に亡くなり、
死亡原因が交通事故によるもの

平成30年度 年齢別死因

厚生労働省HPより

年齢	第1位	第2位	第3位
10～14歳	悪性新生物	自殺	不慮の事故
15～19歳	自殺	不慮の事故	悪性新生物
20～24歳	自殺	不慮の事故	悪性新生物
25～30歳	自殺	不慮の事故	悪性新生物

毎年、3500人くらいの方が交通事故で亡くなっています。毎日9人ちょっとの人が亡くなっていることとなります。しかし、この数は事故から24時間以内に亡くなったほぼ即死の方です。事故から30日以内の死亡数だと4000人を超え、さらに事故が原因で事故から1年以内に亡くなる方は4863人となり、毎日13人が交通事故により亡くなっていることとなります。

次に年齢別の死因を見てください。

不慮の事故とは、交通事故や溺死のことです。15歳から30歳までは自殺と不慮の事故で亡くなる方がほとんどです。自殺するほど辛いことがあったのだと思います。自分はルールを守っていてもルールを無視した運転手に轢かれたり、どんなに気をつけていても事故に遭ったりすることはあると思います。周りの大人が救える命もあったと思います。でも、自分で救える命もあったと思います。自分で命を絶つ前に、交通事故に遭う前に、自分が死んだらどうなるか、自分を大切に思ってくれる人がどんな思いで生きていかないといけなくなるのか、考えてほしいなって私は思います。

子どもたちが事故で命を奪われている。交通事故はとても身近に起こっています。それなのに、私は交通事故はニュースのできごとというか、自分自身に起こることだとは思っていませんでした。他人事でした。まさか、自分の子どもを事故で失うとは考えたこともありませんでした。この先、みなさんが車の運転をすることになったら、ほんのちょっとした確認不足で誰かの人生を変えてしまうことがある、誰かの命を奪うことがあるということを忘れないでください。

睦規のいところが事故のあとに書いた作文があります。とてもよい作文なので、紹介させていただきます。

「従兄との大切な時間」

今年の夏、ぼくの後兄は突然この世を去りました。

その日の朝は、いつもと同じで、何も変わったことはありませんでした。一日過ごして学校から帰ると、玄関に小さなくつがありました。ぼくはすぐに後妹が来ているとわかりました。急にどうしたのかなと思いつながら階段を上がると、いつもと違う表情のお母さんがいました。お母さんは顔を赤くして、今にも泣きそうになりながら、ぼくに言いました。

「いい、よく聞くんだよ」

ぼくが何か悪いことが起きたんだと感じた次のしゅん間、お母さんはドラマのセリフのようなことを言いました。ぼくの後兄が交通事故で亡くなったということ。

ぼくはがく然となり、足ががくがくとふるえて、その場に座りこみました。

「死んだなんてうそだ」

そう言いながら、涙が止まりませんでした。

そこに後妹が来て、

「兄ちゃん、死んじゃった」

と言いました。後妹はまだ3年生です。小さいからなのか、まだ何が起こったのかわからない様子でした。

ぼくの一つ上の後兄は、今年中学1年生になったばかりでした。ぼくたちは小さなころからずっと一緒に、たくさんいる後兄弟の中でも一番の仲良しでした。いつも二人でカードゲームやテレビゲームで遊んで、後兄と過ごす日々はとても楽しかったです。おたがいの家に泊まると、二人で一つのベッドにねて、おそくまでゲームの話をして盛り上がりました。こんな日がずっと続いていくんだと大人になっても変わらないんだと思っていました。

夕方になり、ぼくは家族と後妹を連れて亡くなった後兄に会いに行きました。後兄は家のリビングにある白い布団にねていました。顔を見ると傷もなくきれいな顔をしていて、ただねているだけのようにも見えました。

ぼくは悲しすぎて、後兄に声をかけられませんでした。ただただ涙があふれてきて、本当に死んでしまったんだと、その時やっと少し実感しました。

そこには、ぼくの家族の他にも後兄のお父さんやお母さん、ぼくのお父さんの妹夫婦がいました。みんな暗い顔で、眠っている後兄を見ては涙を流していました。誰も話さず、ただずっと泣いていました。

時々、後兄の友達が来ては、手を合わせていきました。後兄が好きだったお菓子やジュース、手紙や花を持ってきてくれました。後兄には友達がたくさんいたんだと、ぼくはうれしく思いました。

二階の後兄の部屋に行くと、今朝まで遊んでいたのか、布団の上にはカードゲームが置いてありま

した。家には従兄がいることがわかるものがいっぱい、亡くなったことを実感したはずなのに、本当にいなくなってしまったのか、わからなくなりました。

それから3日が経ちました。たくさんの友達に来てもらおうと、お通夜の代わりにお別れ会を開きました。会場には写真がいっぱいはってあり、たくさんの花に囲まれた従兄がいました。会場に入りきれないくらいの人に来てくれて、これならきっと従兄も喜ぶだろうと思いました。

次の日は告別式でした。最後にみんな、かんおけに花をたくさん入れて、お別れをしました。ぼくは泣きながら、

「ありがとう」

と何度も言い続けました。たくさんの花に囲まれた従兄は、大勢の人に見送られながら行きました。

七月の少し雨がふっていた朝、従兄は自転車に乗って通学しているところを大型トラックにひかれました。

自分が注意して走っていても、相手が何かに気をとられていたり、周りを見ていなかったりして気がつかず、ぶつかってしまうことがあるんだと、今回の事故でぼくは身にしみてわかりました。車は止まってくれるもの、気づいてくれるものだという考えは間違っていました。左右を確認して、車が来ていたら止まること。自転車の時はゆっくり走り、周りをよく見ること。それから、相手が自分を見ていない時や目が合わない時は特に注意し、自分が止まることなど、気をつけなければいけないことがたくさんわかりました。

従兄もぼくも、あたり前のように学校へ行き、大人になっていくんだと思っていました。中学生になって新しい友達も増えて、部活や学校生活を楽しんでいた従兄は、十三年間という短い時間でこの世を去りました。これからの人生でいっぱいやりたいことがあったはずなのに。

ぼくは今でも、従兄と過ごした日々を思い出すと悲しくて涙が出てきます。だれにでも優しく、みんなに好かれていた従兄のことを、この先も絶対に忘れないと思います。

ぼくはこれから、いろいろなことを体験し、たくさんを学んで大人になっていきます。従兄の分も、家族や周りの人のことをいつまでも大切にしていきたいです。ぼくがそうやって生きていくことで、従兄も喜んでくれることを願っています。

睦規がいない、そのことはとても悲しくつらいですが、私は睦規のことを聞いたり、生きていたらこうかなって話したりすることは嫌ではありません。睦規の誕生日、命日、クリスマス、お正月、5日の月命日などには、手紙をくれたり、事故があった場所にお花を供えてくれたり、家にお菓子を持ってきてくれるお友達もいます。睦規自身がない家に来ることは勇気がいると思います。でも、私たちは、お友達が「睦規を忘れていないよ」というメッセージを届けてくれた気がして、嬉しく思っています。そういう周りの人たちの温かさは生きる支えになっています。この場を借りて、みなさんにお礼を言います。本当にありがとうございます。

事故から2年。私は毎日、「睦規が生きていれば、今日は立志ウオークか」とか想像したりしていますが、それも中学校卒業までとなります。睦規はどここの高校にも行けないし、社会人にもなれません。もう、この世にいないのです。今でも「睦規がおらんくなった意味が分からん」と思うし、「睦規のいるところに行きたい」そう願うときもあります。睦規という大切な存在、希望、未来を失っても、私は私を大切に思ってくれている人のために生きなくてはなりません。もしかしたら、この先、みなさんにも「生きることがつらい」と思うことがあるかもしれません。だけど忘れないでください。命は自分だけのもの

のではありません。あなたの命を大切に思ってくれている人のためでもあるんです。あなたが思う以上にあなたを大切に思ってくれている人がいるんです。もし、その人が今、目の前にいないとしても、どこかにいます。必ずいます。どうか忘れないでください。

そして、交通事故にあわないよう、起こさないようにしてください。ほんの一瞬の確認不足が、大切なものを奪うということをお覚悟しておいてください。

私がこうやってみなさんの前でお話しすることは決して陸規の死を乗り越えたとか、受け入れたからではありません。私たち遺族のような思いはもう誰にもしてほしくないからです。被害者遺族である私が話すことで、みなさんに交通事故は自分の身にも起こるんだと感じてもらって、交通安全を意識した結果、誰かの命が守られる、そういう社会になることを願っています。

これで私の話は終わりです。

今日は、このような機会をくださいまして、ありがとうございました。